

## 歌舞伎 仮名手本忠臣蔵を観て

12/15/2013

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

五代目の歌舞伎座がオープンしたこともあって、今や「歌舞伎」は大ブーム。そのような中、私は今年海老蔵の「古典の誘い」と「仮名手本忠臣蔵」を観ることができました。どちらも満員で、その多くは年配の女性で、後者では団体で鑑賞に来られている方も大勢いました。地下のお土産コーナーでは、記念の品物を買って求める人で開演前から大混雑でしたが、私の妻もその一員でした。

2講演とも、妻に誘われるままに観賞してきましたが、歌舞伎は学生時代に観たことがあるのみだったので、多少歌舞伎のイロハ本を読み勉強してでかけました。歌舞伎座に一步足を踏み入ると、ロビーの重厚感、そして総数 1,800 あまりの観客席はまさに圧巻でした。開演前には、しばしホール内を散策し雰囲気を楽しみましたが、新設の建物とは思えないほどの歴史を感じました。

さて、今回の「仮名手本忠臣蔵」は、通し狂言と言って物語を最初から最後まで1日で上演しているものでした。私は昼の部のみでしたが、見どころはやはり後半の夜の部です。

幕が開く前に口上人形が出てきました。この人形は定式幕の前で「えっへん えっへん」と咳払いをしながら、役名と役者名を紹介してくれるのです。もちろん、海老蔵、幸四郎や玉三郎らの時は拍手喝采です。これが約 10 分続くといよいよ開幕です。

本でいえば、第一章や第二章にあたる部分が、「大序」「三段目」となっていく、夜の部は「五段目」からはじまり「十一段目」で閉幕となります。ちなみに、私が鑑賞した昼の部の演目は

「大序」 鶴ヶ丘社頭兜改めの場

「三段目」 足利館門前進物の場、同 松の間刀傷の場

「四段目」 扇ヶ谷塩治反感切迫の場、同 表門城渡しの場

「浄瑠璃」 道行旅路の花賀

これでも、11時開演で閉幕は15時でした。

実際の舞台は、背景といい、役者の衣裳といい、きらびやかなもので彩色よく使っているなあと感心させられました。また、何と言っても、表舞台に出ませんが、ナレーション役の義太夫(竹本)の声と三味線の音色です。場内に何ともいえない響きが場を盛り上げてくれていました。

「仮名手本忠臣蔵」は、実際にあった忠臣蔵の登場人物の名前を変えてドラマ化したもので、この時代は実際に起きたことを演ずるのが厳しい状況にあったためドラマ化したようです。

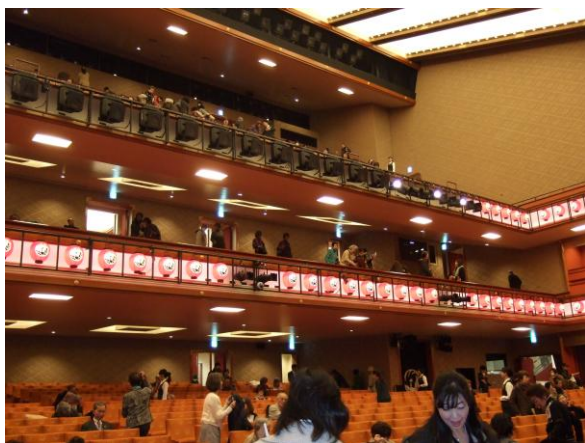
これと同様に事件をもとに演目されたものの代表作に「心中天網島」「東海道四谷怪談」があるようです。一幕毎に、舞台が代わり、静と動、立役(善人)と敵役(悪役)が衣裳や顔つきでわかるように工夫されており、初めての観客にも理解できるようになっています。また、笑いをとる場面では道化方が出てきて、会場を賑わせていました。

このようにして、歌舞伎の中には観客に理解できるいろいろな工夫があり、江戸時代から 400 年続く歌舞伎の積み重ねが今日に生きていると感じさせられたひとときでした。

私は当日、イヤホンを借り、説明を聞きながらでしたので、今何をしているかとか、この背景の理由とかを説明してくれるので、ストーリーなどよく理解することができました。

今度は夜の部に出かけることにしたいと思います。

一幕毎の席も 120 席程用意してあるそうです。但し4階です。



← 1 階から見上げた 2 階、3 階席(開演前)  
正面玄関 ↓



以上